
立ち止まるとき

長月 タ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

立ち止まるとき

【Nコード】

N0785A

【作者名】

長月 夕子

【あらすじ】

立ち止まるとき、僕は何故、小説を書くのか。

ポケットの中で指先に触れる。火照った手のひらに心地よい冷たさ。軽く握ったあと、その滑らかな鉄の肌を指でなぞる。

つるりとした線に続く、やがて複雑な凹凸。中央の溝をたどればまた、平らな表面。

鍵。

小学生だった頃、僕は紐のついた家の鍵を首から下げていた。

それはとても大事なものだと言い聞かされ、僕もまたそれをなくす事を何よりも恐れた。

十二月の冷たい風の中、あけることの出来ないドアの前に立ち尽くす僕自身を思い浮かべては、鍵を握り締める。

やがて引越しが決まり、家は取り壊された。

僕の手には鍵だけが残った。

そして10年。

10年前の僕の見知らぬ町にいる。

取り止めの無い事象が浮かぶに任せて、行く当ても無く僕は歩きつづけた。ポケットの中のその鍵をひたすらに遊びながら。

20歳になった僕はどこへも行けるしどこへも行けない。

開けることも閉めることも出来ない鍵とどこか似ているのかもしれない。

鍵は重くも無く軽くも無く、まるで魂そのもの。

果てしない思考を引きとめる唯一の現実。

手とは裏腹に冷たい足先は、まるで空を歩くようにふわふわと頼りない、鍵の存在感以上の物がいつしか見当たらない。

不思議なほど鍵は僕の手のひらの温度に沿うことは無く、いつまでも冷たく主張していた。

開けることの出来るドアなどこの世界には存在し無い、二度と使われることの無い鍵を僕は強く握る。
刻まれた形がそのまま僕に残る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0785a/>

立ち止まるとき

2010年10月11日20時45分発行